

中長期（2011～2020年）活動方針大綱案

テーマ「和解のつとめに仕える」

～和解の福音に生きるバプテスト教会の形成と伝道～

聖書：コリント信徒への手紙 二 5章17～20節

だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。（第二コリント 5章17～20節）

：テーマ「和解のつとめに仕える」

神に逆らい、交わりを絶ち、その結果、霊的にも肉体的にも裁きの中にある人間は、自らの力で神との関係を修復し、平和を得ることはできない。ただインマヌエルの主、イエス・キリストの十字架と復活において神と人との和解が成し遂げられた。

和解の福音は、神に立ち帰る呼びかけであり、常に私たちを神ご自身との交わりへ招き、さらに人間相互の、またすべての被造物との交わりに招いておられる方への信仰を新たにすることである。この「イエス・キリストによる和解の福音」に仕えることが、最初の教会から今日に至るまで、宣教＝ミッション＝使命であり続けている。神との和解にあずかり平和を得た者は「新しく創造された者」として、人と人、人と被造物との和解の働きに仕え、平和を創り出していく使命を託されているのである。

前世紀の終わりから、国境を越えて地球規模で人や経済や文化の変化のスピードがますます加速し、経済力のあるものの横暴が「自由」と呼ばれ、強い者が勝ち残り、弱い者が捨てられていくのが「当たり前」になりつつある世界に私たちは生きている。勝ち残るためなら何をしてもいいという考えが渦巻き、神に創られたものたちが分断され、敵対させられ、破壊され、呻いている。若者が、子どもが、おとなが、高齢者が、つながりや帰るところを失い、孤立し、その生存が脅かされている。

そのような世界の隅々において、教会はイエス・キリストの福音をいついかなるときにも明確に伝道していく群れでありたい。その言葉で、あり方で、行動で、和解に生かされる喜びと希望の光を具体的に証していきたい。分断され敵対させられ孤立してきた者同士が、和解のいけにえを携えて、共に神の前に礼拝をささげていく。そしてキリストの平和と癒しのうちに関係性と共同性の回復に導かれ、「新しく創造された者」として世界に派遣されていく。

そのようにして、教会こそがまずキリストにおける神との和解にあずかり、和解のつとめの豊かさ立てられていく信仰共同体でありたいと願う。

連盟は、「バプテストの主義と理想」に基づき、加盟教会相互の協力を通して、教会の霊的生命を深め、伝道、教育、出版等を通して、キリストの福音をひろめるために結成された協力伝道体である（連盟規約第3条参照）。

しかしながら、2009年度には歴史ある教会が閉鎖、解散に至り、私たち加盟教会がこれまでどのような協力伝道体を形づくり、どのような協力伝道を進めてきたのか、その内実が厳しく問われる出来事が起こった。また教勢報告等のデータから見る諸教会の状況は厳しいものがあり、特に連盟内で財政的規模の小さな教会の比率が漸増しつつある。さまざまな課題を孤立の中に放置するのではなく、「和解」というテーマのもとでお互いの関係性をもう一度見つめ直し、バプテストらしく、それぞれの主体性を尊重しつつ、オープンに自分を開いて関わり合う協力関係、信頼関係をつむぎだしながら、協力伝道体の課題として共に重荷を担っていきたいと願う。

そして、私たちバプテスト教会に与えられている豊かな可能性、マイノリティ（少数者）の群

れだからこそ担える働きを受け取り直し、祈りを結集し、知恵と力をあわせた協働のわざへと導かれていきたい。平和を創り出すために。引き裂かれ、呻きながらからだの贖いを待ち望んでいるすべての被造物、すべての人々と福音を分かち合うために。

最後に2002年11月の定期総会で採択された『平和に関する信仰的宣言』の前文と結語から引用して結びとしたい。私たちが拠って立つ福音と、私たちが招かれている希望とがそこに明確に語りぬかれているからである。

「しかし今、世界は敵意に満ちている。殺戮と報復が果てしなく繰り返され、絶望が支配しようとしている。十字架の主イエスはこの世界において審きと和解を為し、解放と平和を告げ知らせ、私たちを復活のいのちへ導かれる。私たちが静まって沈黙し、主イエスの声に聴く。教会は救われた者の群れとして応答に生きる」(『平和に関する信仰的宣言』前文より)

「主イエスの十字架の和解はすでに成し遂げられた。絶望の闇はこれに勝たなかった。私たちが復活のいのちに与り、平和を創り出す。主は世の終わりまでいつも私たちと共におられる。

終わりの日に、主は敵意と殺戮、報復と絶望を完全に終わらせ、苦しめられてきた者たちの目から涙を全く拭い去ってくださる。教会は主が来られる時に至るまで主の死を告げ知らせ、和解の福音を担い続ける」(同じく結語より)

：日本バプテスト連盟の使命と働き（ミッション・ステートメント）

新しい中長期活動方針大綱の策定にあたり、私たちは協力伝道体としての連盟の使命と働き（ミッション・ステートメント）を次のように確認したい。

- (A) **キリストにある和解と平和の実現** **<福音の広がりと深まり>**
神の国と神の義を求め、生の中領域でキリストの和解と平和の実現を祈る。教会自身の交わりが、神の義に基づき、さまざまな差別や抑圧からの解放の喜びを分かち合う交わりとなるように。
- (B) **「地の塩・世の光」の使命を生きる** **<加盟教会の霊的生命>**
「全日本にキリストの光を」。日本各地に建てられた加盟教会（伝道所）の霊的生命が深められ、生の中領域で福音を証し、「地の塩・世の光」の使命を生きるキリストの体として生き活きと建てられていくことを祈り、励まし合う。
- (C) **この世界で礼拝者として生きる** **<使命に生きるキリスト者>**
キリストの体に結びつけられた一人一人の教会員が、「新しく創造された者」としてこの世界に派遣され、家族や地域の中で礼拝者として福音を証していく。その使命に生きる喜びを分かち合う。
- (D) **バプテスト教会の形成を通してキリストのからだを建てる** **<バプテストの教会形成>**
バプテストの特質を生かした教会、すなわち一人ひとりに与えられた告白を大切にしつつ、異なる者が対話し響きあう教会、教会員一人ひとりが主の前に献身し宣教と牧会の働きに参加していく教会の形成を通して、キリストのからだを建てていく。
- (E) **先立つ主の働きに参加し出かけていく** **<開拓伝道、世界伝道>**
この世界で先立つ主が働いておられる現場に働き人を派遣し、開拓伝道に取り組み、祈りと献金をもってその働きに連帯する。
- (F) **福音に仕える献身者を生み出し養成する** **<伝道者養成>**
協力伝道の祈りとビジョンを大切にして教会に仕え、世界伝道に仕えていく献身者を生み出し、養成する。
- (G) **共に労苦し、共に喜びに与る協力伝道体** **<ネットワークと協働>**
協力伝道が、それぞれの教会の課題となり、祈りとなるようなネットワークを形成していく。地方連合と良い連携をもって、加盟教会（伝道所）が共に労苦と喜びを分かち合う協働を創り出しながら、協力して伝道に取り組む。

： 2011～20年の10年間の＜重点課題＞

1) 「和解のつとめ」に献身し、協力して伝道し、証する教会

- ・ 諸教会に仕えていく献身者の掘り起こしは最重要課題である。若い世代の伝道者の掘り起こしに力を入れ、教会と神学校とが有機的連携をもって「和解のつとめ」を担う伝道者の養成と継続訓練に取り組む（宣教研究所はコーディネーターとしての役割を担う）。
- ・ 献身者は、福音の使命を生き活きと生きる教会で育まれる。教会を担う信徒、対話と相互性を大切にする信徒の成熟はバプテストの教会形成に欠かせない。バプテスト教会を担う信徒の研修を充実させる（連立立神学校との連携）。
- ・ 神との和解から開かれる豊かな関係性や共同性を培う礼拝と教会学校の充実に取り組む。
- ・ 地域協働運動を推進し、開拓伝道の協働、教会研修の協働などを励ましていく。
- ・ 先立っておられる主の招きに応えて、この世界で和解のつとめに仕える働き人を派遣し支える。
- ・ 特別委員会の働きを通して明らかにされる現代世界が抱える命の課題に共に聞き、人々と協働していく。「平和宣言」を生きる教会運動を進める。
- ・ さまざまな差別や抑圧からの解放の喜びを分かち合う教会を目指す。

2) 「祈って欲しい」「助けて欲しい」と言い合える関係づくり

- ・ 「孤立」や「閉塞」に陥ることなく、協働して共に地域の宣教課題を担い交流を起こしていく10年とするため、連盟と地方連合との良い協働、連携をさらに深めていく。
- ・ 協力伝道体を構成している意味を共有し、各個教会の主体性・自治を尊重しつつ、互いに自らを開き、切磋琢磨していく関係を確認していきたい。

3) 青少年が生きる信仰共同体の内実を深めていく

- ・ 「青少年育成」の課題は、青少年世代のみを対象にする問題ではなく、青少年を含む全年齢層のメンバーが「相互に育成される」課題であることを共有したい。
- ・ 教会で養い育てられる若者たちを線で追いかけて、見つめられるように意識する。小羊会から青年会、女性・壮年会まで流れをもったプログラム編成を工夫しつつ、「伴走者」というリーダー像をイメージできるように研修プログラムを提供する。

4) 協力伝道献金体制の確立

- ・ 協力伝道献金体制を確立していくため、協力伝道の使命と働きを共有し、献金と祈りをもって協力伝道に参与する姿勢を互いに確認していく。
- ・ 協力伝道献金（1億7千万円に想定）に見合った活動の絞込みと連盟事務所の仕事の絞込みに取り組む。
- ・ 宣教研究所、天城山荘、連盟事務所の中長期展望を踏まえた財務基本計画を策定し（2015年前までに）実行していく。

：施策案

1．連盟の使命と働きの共有

- a. 地方連合連絡協議会で検討してきた「諸教会間の交わりや対話を生み出していくために」(申し合わせ)の文章などを通し、連盟や地方連合(協力伝道体)を構成している意味を共有する。
- b. 総会の持ち方の改革に取り組む(計画やビジョンの話し合いに時間を集中)。
- c. 毎年の定期総会で上記の課題に関する協議の場を設定するなどして、各個教会の「自立」は「孤立させない」(抱え込まない、助けてと言える)関係性の中で育まれていくことを確認していきたい。
- d. 「宣教ローカル・ミーティング」(地域での伝道協力協議。地方連合より小さな単位で、あるいは地方連合を超えた協力も)を通して、諸教会間の協働意識を育てていく。

2．伝道者養成、牧師の継続訓練

- a. 献身者を送り出す教会/神学校/新任牧師と共に立つ教会、それぞれが<献身>と<召命>の吟味において責任をもって関わり、有機的に連携し、「和解のつとめ」を担う伝道者を養成していく。
- b. 女性献身者を牧師招聘していく教会が増加するよう励ましていく。
- c. 青年大会や少年少女大会などでの献身者の掘り起こしに加えて、神学校からの発信やアピールに力を入れる。毎年神学校から新たな牧師を10名以上送り出せるよう祈りを合わせていく。
- d. 宣教研究所は、献身から神学校入学、赴任後の研修まで継続的にフォローし、教会や各神学校の働きをコーディネートする「牧会研修」部門を強化する。「神学研究」については西南神学部との連携を強化する。
- e. 献身者が、自らを開示し助言を受ける関係性の中で研鑽を深めていくバプテストの牧師像を身につけていくことができるよう支援する。
- f. 連盟は、特に新任牧師、あるいは財政状況が厳しい教会の牧師の継続研修支援を充実させる。

3．教会形成

- ・バプテストの教会形成
- ・「和解のつとめ」に仕える教会
- ・信徒の学びと訓練
- ・豊かな関係性と共同性を培う礼拝と教会学校

- a. 各個教会が自らの「使命と働き」(ミッション・ステートメント)を確認し、バプテストの特質を生かした教会形成が生き活きと行われていくような研修運動、信徒一人ひとりの献身を深め、それによって共同性を培っていくような研修を起こしていく。
- b. 「和解のつとめ」に、その言葉で、あり方で、行動で、仕えていく教会形成を支援する。特別委員会の取り組みや「平和宣言」が指し示す福音の深みと希望が、各個教会の教会形成の課題となり力となるような働きかけをしていく。
- c. 宣教部に「教会研修総合窓口」を置き、個別教会のニーズにあった教会研修プログラムを提案する。財政状況が厳しい教会の研修活動を支援し、カリキュラムおよびプログラム作成、講師の養成と研修については、地方連合、宣教研究所、連立立神学校と連携して行う。

- d. 『聖書教育』編集・発行、教会学校研修会の実施を通して、教会学校奉仕者を励まし、教会に「共同性」を培うためのプログラムを提供することに努める。
- e. 全国教会学校研修会（2009年度）を受けて、当面は地方連合、個別教会での研修会の推進に取り組む。
- f. 教会教育に関する諸課題の継続研究に取り組む。
- g. 主日礼拝が、神との和解の喜びと、そこから開かれる豊かな関係性と共同性を分かち合うものとなる研修を考えていく。
- h. 礼拝の中での共同の業である会衆賛美をさらに豊かなものにするため、賛美の研修（礼拝音楽研修会）や情報（新生讃美歌ニュースレター・教会音楽ネットワーク）を提供し、また礼拝を支える奉仕者、奏楽者、聖歌隊等の働きを支援するために、楽譜提供、ネットワークを作っていく。共同性をもった賛美の創作に取り組む。

4. 青少年運動の推進

- ・青少年が生きる教会の形成
- ・青少年育成のための働き人の強化
- ・青少年プログラムの充実と連携

- a. 青少年を含む全年齢層のメンバーが「相互に育成される」教会づくり、その交わりにおいて、さまざまな「隔て」を越えて和解が起こっていくような教会づくりを励ます。
- b. 青少年伝道室、専門委員の働きを強化する。青少年の育成イメージを諸教会と共有しつつ、小羊会キャンプから青年大会までの継続したフォロー、各地域や各教会での青少年育成を励ます。
- c. リーダー研修会を充実させると共に、リーダー育成の連続性を持たせる。
- d. 教会に「世代交代」の気運を起こし、青少年世代の子を持つ親への働きかけと意識共有の場所づくりを行う。
- e. 多様な分野での献身を励ます中で、神学校入学者、国際ミッション・ボランティア志願者（将来アジアと日本の教会をつないでいく人材）の掘り起こしに力を注ぐ。
- f. 「隣人に出会う旅」と「全国少年少女大会」の隔年開催については、2013年まで継続した上で評価する。
- g. 複数教会による伝道隊派遣、伝道交流、ボランティアチーム派遣（それらの働きは壮年会や女性会の協力が不可欠）あるいは「教会生活体験留学」など、青少年を巻き込み、育てていくプログラムを創出し、励ましていく。
- h. これら青少年運動推進のため、協力伝道献金の中から特別な予算措置も考える。（例：次の10年は、毎年1000万円の地域協働積立の一部を青少年育成に投入するなど）

5. 国内伝道

- ・各地における地域協働の推進

- a. 各地においてセンター的機能を担う教会の活動を励ます。地方教会の課題を共に担い、その地域での協働運動の渦を起こして、教会間の関係性を紡ぎ出し、その働きの中で青少年を育てていくような教会。
- b. 伝道協力体として踏み込んだ関わりが求められている教会への関わりを地方連合と連携して取り組む。伴走するパートナー教会のコーディネート（近隣だけでなく、地方と都会の教会のパートナー化も）伝道プログラム支援、教会形成コンサルティングなどの有効な活用。

・全国支援・地域協働プロジェクトの推進

- a. 全国支援・地域協働プロジェクト支援を今後も継続する。同積立金は2009年度末には約1億9500万円になる予定。毎年協力伝道献金から1000万円の積み立てを今後も続ける。青少年育成にその一部を振り分けることも検討する（前述）。
- b. 全国支援・地域協働プロジェクトへの応募を勧奨する意味で、連盟支援枠（現在：3000万）の増額や条件緩和を検討する。
- c. 2011年からの10年間における地域協働積立金の使途の想定（例）…新潟地区プロジェクト（決定済み）に2000万、新規開拓伝道に2箇所（一箇所5000万で最大1億）、一県一教会の教会復興に1～2箇所（一箇所5000万で最大1億）、その他のプロジェクト（複数箇所）に5000万など。

・地方連合との協働

- a. 相互支援における地方連合との協働については、この数年間に及ぶ地方連合連絡協議会（支援評価チーム）での検討を踏まえて、当面は「支援の制度は連盟が持ち、地方連合が説明、申請窓口を含めて、助言的な関わりをもって参与する」。
- b. 連盟と地方連合の役割と働きの違いを確認しつつ、それぞれの地方連合の体制に応じた協働の連携を強めていく。

・一県一教会

- a. 地域協働では取り組むことが難しい地域（一県一教会など）での教会復興に、新たな枠組みの創設を含めて、連盟として重点的に取り組む。

・その他、伝道活動支援など

- a. 個別教会の伝道活動をサポートする伝道方策の収集、ツールの作成、情報交換などを行う。
- b. 地方教会の働きに参与する信徒の「献身」のコーディネート。
- c. 老朽化建物の教会の需要に対する、建築（改築）ボランティアチームのコーディネート。
- d. 教役者退職金制度改革による厚生年金移行を支援する。厚生年金移行の達成後は、年金受給額が一定の基準に満たない教役者への付加給付年金制度の整備に取り組む。

6. 国外伝道

・理念

- a. 従来の国外伝道理念（1979年、1991年補足）を踏まえて、戦争責任告白と和解のつとめ、関係性の回復に仕える視点から、アジアをはじめ全世界の教会と対等なパートナーとして共に歩むために、新しい国外伝道の理念づくりを検討する。
- b. 国外伝道理念に基づき、諸教会と国外伝道の使命を共有するための「国外伝道の使命と働き（ミッション・ステートメント）」を作成する。

・宣教師派遣

- a. 理念に基づき、戦争責任告白をふまえ、和解のつとめに仕えて、そこに生きる人びとと共に主から聴き、共に歩む「宣教師」を派遣する。
- b. 多様な働き人の派遣を目指す。また、次期宣教師・アジアとの架け橋となる人材を育てるため、「国際ミッション・ボランティア」を派遣する。

- c. 派遣に際しては、これまでの派遣形態に加えて、働きや内容に応じた派遣形態を柔軟に設定する。
- d. 宣教師、国際ミッション・ボランティアを育てるための奨学金・奨励金を設定し、サポートする。

・人材育成・掘り起こし

- a. 諸教会が自らの宣教課題として、国外伝道を担うことができるように働きかける。そのためにアジアや世界についての必要な情報提供を行う。
- b. 神学教育における国外伝道教育の推進を行い、献身者への国外伝道意識の構築を積極的に推進する。
- c. ミッション・スタディ・ツアーやフィールドツアーなどを継続して実施し、アジア諸国や世界で先立つ主の働きにふれ、国外伝道への具体的な献身を促す。
- d. 諸教会において、国外伝道理念の紹介や学びの推進を行い、一致した思いで国外伝道を担う。

・宣教協力

- a. シンガポール伝道の継続・・宣教師派遣終了後も、戦争責任告白を踏まえつつ、シンガポールにおける日本語伝道のための宣教協力を継続する。当面は経済的自立を目指した支援を継続する。
- b. 宣教師の受け入れ・・米国やアジア諸国などの友好団体から宣教師を受け入れていく。
- c. 諸教会から派遣されている働き人を、祈りに覚えていく。

7. 機構改革・・協力伝道献金体制の確立

- a. 協力伝道献金の一層の推進。財政規模の大きな教会の協力伝道への参与（標準比率の遵守）を呼びかけていく。
- b. 協力伝道献金は1億7千万円を想定し、収入に見合った活動の絞込みと連盟事務所の仕事の絞込みを行う。人員のスリム化（専任10名体制へ。人件費8500万円＝協力伝道献金の50%）を実施する。
- c. 財務基本計画の策定
 - 1. 一般会計は協力伝道献金で担う。新たに、連立立神学校支援、教役者退職金会計支援、事務所管理負担などを一般会計で担う。
 - 2. 宣教研究所は、一般会計繰入れと資金取崩し（2020年まで可能）とで活動を継続する。2021年以降のあり方（組織の改編検討と同時に資金追加投入の見直しなど）を中長期前半で検討し提案していく。
 - 3. 天城山荘・・営業の強化。1号館の耐震補強工事と設備刷新、及びチャペル通路などのバリアフリー化に取り組む。そのための連盟からの融資、資金投入を考える。
 - 4. 連盟事務所・・当面は現在の建物を手入れしながら使用する。将来的には規模縮小＋移転（身の丈にあったサイズに）も視野に、職員住宅を含めた中長期計画を策定する。
 - 5. 将来、不動産処分で資金が得られた場合にどのような働きに振り分けていくのか。地域協働積立、宣教研究所、事務所管理など、その優先順位と規模を次期中長期前半で計画化していく。